研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-730		17-100	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　三浦克之

題名（原題／訳）

Alcohol consumption and mortality from aortic disease among Japanese men: The Japan Collaborative Cohort study.

日本人男性におけるアルコール摂取量と大動脈疾患死：The Japan Collaborative Cohort study

執筆者

Shirakawa T, Yamagishi K, Yatsuya H, Tanabe N, Tamakoshi A, Iso H; JACC Study Group.

掲載誌

Atherosclerosis. 2017 Nov;266:64-68. doi: 10.1016/j.atherosclerosis.2017.08.025.

キーワード	PMID
大動脈解離、腹部大動脈瘤、大動脈疾患、アルコール、前向きコホート	28982024

要　旨

目的：

日本人男性におけるアルコール摂取量と大動脈疾患（大動脈解離、腹部大動脈瘤）による死亡との関連について検討した。

方法：

1988-1990 年に The Japan Collaborative Cohort Study に参加した男女 110,585 名のうち、がん・心血管疾患既往歴およびデータ欠損のない男性 34,720 名を解析対象とした。アルコール摂取量はベースライン時および 5 年後に実施した自記式質問票により、飲酒頻度（/週）、種類、飲酒量（/回）を聞き取り、非飲酒者、過去飲酒者、現在飲酒者（エタノール:≦30g/day, >30g/day）に群分けした。5 年間で飲酒カテゴリーに変化があった場合、5 年後のデータを採用した。追跡期間中の死亡は ICD-10 に基づき診断した（大動脈解離 I710, 腹部大動脈瘤 I711-I719）。Cox 比例ハザードモデルを用い、アルコール摂取量による大動脈疾患死（大動脈解離、腹部大動脈瘤）のハザード比（HR）および 95%信頼区間（95%CI）を算出した。調整変数として、年齢、BMI、喫煙、高血圧および糖尿病の既往歴を用いた。

結果：

追跡期間 17.9 年（中央値）の間、大動脈解離死亡 45 名、腹部大動脈瘤死亡 41 名であった。現在飲酒者（≦30g/day）は、非飲酒者に比べ、大動脈疾患および大動脈解離による死亡リスクが有意に低かった（大動脈疾患: HR [95%CI] = 0.46 [0.28, 0.76], 大動脈解離: 0.16 [0.05, 0.50]）。一方、現在飲酒者（>30g/day）および過去飲酒者は、大動脈疾患（大動脈解離、腹部大動脈瘤）による死亡との関連を認めなかった。

結論：

日本人男性において、軽度から中程度のアルコール摂取は大動脈疾患、特に大動脈解離による死亡を減らす可能性があることを示唆した。一方、多量飲酒にそのような作用は認められなかった。